

ロコトウガラシ (*Capsicum pubescens*) を用いた生食用新規辛味トウガラシの育成

○鬼木 清¹⁾・宮島郁夫²⁾

¹⁾福岡農高専攻科・²⁾九州大熱研セ

【目的】ロコト(*Capsicum pubescens*) は南米のアンデス地方(ペルー, ボリビアなど)で主に栽培されるナス科トウガラシの一種である。花冠は紫色, 茎葉に細かい毛が密生しており, ピーマンに似た縦径 3~4 cm のベル状の果実をつける(第1図)。完熟した果実は赤色もしくは橙色で辛味が強いが, トウガラシ類の中では比較的果肉が厚く, うま味が強いことが特徴である。ペルーでは肉詰め(ロコトレジェーノ)として食される場合や, つぶしてペースト状にした果肉をサラダ等の薬味として利用することが多く, 乾燥用トウガラシの利用が主流の我が国で, 今後, 生食用の辛味トウガラシとしての利用が見込まれる新規な野菜である。

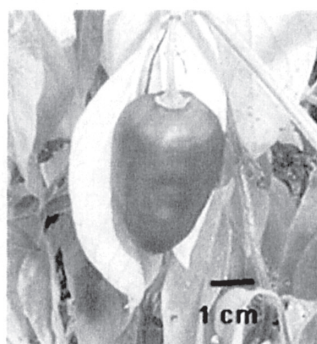
わが国で広く栽培されているトウガラシ(*C. annuum*)は自家受粉によりほぼ 100%の割合で結実が認められるが, ロコトでは開花数日後に花柄の基部に離層が形成されて脱落することが多く, 収穫できる果実が少ない。また, ロコトは夏季の乾燥時にはホコリダニ類による加害が著しいため温暖な地域での栽培は困難とされている。現在のところ, 長野県内の比較的標高の高い冷涼な地域で試験的な栽培がおこなわれているが, 商業生産までには至っていない。

そこで, 北部九州の環境に適したロコト系統の育成のために生育調査と花粉の行動調査を行った。

【材料および方法】2009年10月6日にロコトの種子をセル成型トレイに播種した。培養土にはバーミキュライト:ピートモス=1:1を用い, 播種後濡らした新聞紙で被覆して湿度を保ち 25°C インキュベータに搬入した。

発芽後, インキュベータから取り出して育苗し, 本葉 3 枚展開時に直径 120mm の黒丸ポットに鉢上げして福岡農業高校専攻科加温ガラス温室内(最低温度 15°C, 日長 16 時間)で栽培した。施肥はハイポネックス液肥(N:P:K=6.5:6:19) 1000 倍液を週 2 回施した。正常に生育した 7 個体のロコトについて, 草丈, 株幅, 花色, 果実数および種子数を調査した。さらに, ロコトの成株を材料に, 酢酸カーミン染色法による花粉稔性調査と花粉の発芽率調査(ショ糖 10%+ホウ酸 0.01%+寒天 10%培地)も行った。対照として, *C. annuum* と *C. frutescens* を用いた。

【結果および考察】調査した 7 個体のうち, R-01 は草丈 94.2cm, 株幅は 41.4cm で草丈/株幅比は 2.28 となり草型は立性に, また, R-02, R-04 および R-06 の草丈/株幅比はそれぞれ 0.36, 0.69, 0.47 で開張性と分類された(第1表)。花色は薄紫色, 紫色, 濃紫色および白色と個体によってさまざまであった。これらの個体のうち, 結実が認められたのは R-02 および R-04 の 2 個体のみであった。他の 5 個体でも開花は認められたが, すべて花柄基部から脱落し着果しなかった。この着果不良の要因を明らかにするために, 花粉の稔性調査と花粉管の発芽調査を行ったところ, ロコトの花粉稔性は約 85%であり, *C. annuum* や *C. frutescens* とほぼ同程度であった。また, ロコトの花粉は人工培地上で正常に発芽することが認められたことから, 着果不良の原因は受精不良もしくは受精後の胚の未発達等による可能性が示唆された。



第1図 ロコトの果実

第1表 ロコトの形態調査

個体 番号	草丈 (cm)	株幅 (cm)	草丈/ 株幅	草型	花色	果実数	全種子数
R-01	94.2	41.1	2.29	立性	薄紫色	0	—
R-02	25.6	70.2	0.36	開張性	薄紫色	1	14
R-03	68.0	49.0	1.39	中間	濃紫色	0	—
R-04	34.0	49.0	0.69	開張性	紫色	4	20
R-05	65.0	76.3	0.85	中間	濃紫色	0	—
R-06	30.3	65.0	0.47	開張性	紫色	0	—
R-07	45.0	32.5	1.38	中間	白色	0	—

2010年5月7日調査